九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

芥川龍之介文学と映画 ： 映画文化への文学の対応／文学作品の映画化

大石，富美

https://hdl.handle.net/2324/4475214

出版情報：九州大学，2020，博士（学術），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

（様式６－２）

氏　　名	大石　富美		
論　文　名	芥川龍之介文学と映画――映画文化への文学の対応／文学作品の映画化		
論文調査委員	主　査	九州大学教授	松本　常彦
	副　査	九州大学教授	波潟　剛
	副　査	九州大学准教授	西野　常夫
	副　査	専修大学教授	髙橋　龍夫
	副　査	フェリス女学院大学名誉教授	宮坂　覺

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、芥川龍之介の文学を同時代の映画メディアおよび映画文化との関係において捉え直すとともに、芥川作品の映画化にともなう読み替えや原作参照の様相の検討を通じて、原作に潜在した読解可能性と映画化にともなう種々の問題を抽出している。

論文の構成は、序章と終章を含めると全体で九章から成り、そのうち本論部分は２部七章構成になっている。具体的には、第１部（第一章～第四章）では、映画文化や映画メディアへの文学の対応として芥川作品の読解を行い、第２部（第五章～第七章）では、芥川の原作と映画との対比の問題、また映画化にともなう受容上の問題について検討し、その検討から再帰的に作品と映画との分析と解釈を行っている。

序章は、映画文化との比較という問題設定の意義、先行研究の確認、論文の構成の説明である。

第一章は、1917年発表の「片恋」が、日本の映画史を背景にしたとき「活動写真」から「映画」に転じる時期の作品であることを指摘し、作品の解釈においても、その変容の中で、見られる客体から見る主体として現れる女性像の問題や「活動写真」の体験の反映という文脈を読み取るべきことを指摘した上で、新たな作品読解を施している。

第二章は、1920年発表の「影」が小説内で映画を描いている点に注目し、その体験性は当時のサイレント映画における文字を読む体験と相同的であるとして、小説内映画に描かれた分身現象を相互に侵犯しあう映画と文学の関係性の比喩的表象として解釈している。具体的には、「プラーグの大学生」の主題を文学に取り込んだような挿話を通して、当時の新しい芸術としての映画と既存の小説との相互侵犯的な関係性が投影した作品という見解を提示している。

第三章は、芥川の最晩年に当る 1927 年発表ながら従来の解釈枠では十分に評価されてこなかったシナリオ形式の作品「浅草公園」について、1923年の関東大震災後の一種のポスト震災文学として捉え直し、個々の映像的な場面やイメージを新たに解釈している。また、シナリオ中の花の表象に注目し、芥川が震災後に書いた雑記や感想などに比し、ポスト震災文学としての「浅草公園」の特色が「否定的精神」に傾斜していることを指摘している。

第四章は、1927年発表のシナリオ「誘惑」について、谷崎潤一郎との間に交わされた「筋のない小説」や「「話」らしい話のない小説」をめぐる論争との関係から分析し、その実践としてのシナリオの意義や特色について、当時の前衛芸術で鍵となっていた「構成」の問題との関連から可視化している。その際に、1923年日本公開のドイツ映画『死滅の谷』の影響など、「誘惑」と映画との具体的な関係についても指摘している。

以上の第１部を通じて、芥川の映画に対する捉え方が、大衆文化の娯楽的な要素が強いものから、

文学と相互に受容者を取り込み合う分身的な存在、そして自らの芸術理論とも共鳴するものへと変化していく過程を明らかにしている。

第２部となる第五章では、黒澤明の映画「羅生門」（1950）の原作となった 1922 年発表の「藪の中」について、映画にも取り込まれつつ映画との相違も際だたせる真相の不在を構成する語りの構造が、当時の陪審制度の導入とも呼応する司法権力の閉鎖性に対する批判として機能していることを指摘している。その上で、映画「羅生門」は、戦後の時空の中で同種の批判性を継承するだけでなく、芥川の「偸盗」の子どもの誕生のトピックを援用することで、新しい時代の希望と占領下の傷跡という重層的な象徴性を付与すると指摘し、アダプテーションの意義を明らかにしている。

第六章は、黒澤の「羅生門」とそのハリウッド・リメイク作「暴行」（1964）に注目し、芥川の原作からのアダプテーションのプロセスを描出することで、原作および映画「羅生門」の権力批判の構造が、アメリカ社会でどのように読み替えられたかを明らかにしている。

第七章は、1920 年発表の「南京の基督」を原作とする香港・日本合作映画「南京の基督」（1995）について、映画における芥川像のクローズアップに注目し、それが原作と映画との間にあるもう一つの大きな違いである南京事件の前と後という問題を保留する機能を持つと指摘し、そうした視点や問題意識から、原作と映画が持ち得た政治的意味や解釈可能性を提示している。

以上の第２部を通じて、芥川作品の時代や文化圏やジャンルを跨ぐアダプテーションの実践の具体的な事例とその様相を明らかにしている。

終章では、各章の内容を整理した上で、今後の研究展望や研究課題が提示されている。

以上、第１部と第２部における検討を通じ、従来の研究では、その意義が十分に把握されてこなかった作品や十分に可視化されてこなかった解釈上の問題について、きわめて精緻に、高い水準で明らかにしている。

以上の論文内容および論文の意義から、委員全員一致で、本論文が地球社会統合科学府の博士学位（学術）論文として十分な水準にあると判断した。